

### (3) NPO団体からの発表及び質疑応答

司会： 本日進行役を務めますAです。

本日の会は、「NPOによる活力ある地域の創造 ～住民参加をキーワードにした取り組み～」ということで、西部の住民活動団体の事例発表をいただくことになっています。

県西部は少子高齢化・過疎化が非常に進行しており、地域のカも弱体化していると言われていますが、住民と行政の協働、パートナーシップの中で地域を維持し、力を付けていくことがより重要だと感じています。各市町村の持っている課題はほぼ共通しています。それぞれの活動を知り合い、参考にすることが、この会の大きな意義ではないかということで、8団体の方々に報告をいただきながら、知事との対話を行います。

Bさん： 「みはらあさぎり会」です。平成19年10月に設立した団体です。設立当初、「かかし祭り」と言う、手作りのかかしを使って、農作業を再現した展示会をやりました。他に、県、村発注の草刈り事業をやりました。

三原村では、今年新しくインターネットの高速回線が開通しました。従来のISDN回線は、非常に遅く、インターネットを十分に楽しめる環境ではありませんでしたが、ADSLが開通して、かなり速い速度でつながるようになりました。これにより、インターネットの普及率が高まるのではないかと三原村を宣伝するポータルサイト、玄関サイトを作りたいと、「三原村.com」というホームページを8月くらいから本格稼働させたいと思っています。

内容は、三原村全体をブランド化というイメージで作りたいと思っています。三原村には自然がいっぱいあり、絶滅基準に指定されているヒメノボタンや、ワラビ、ゼンマイ、イタドリ、野イチゴ、自然薯などのすばらしい作物が取れますので、これを活かしたバーチャル植物園を展開したいです。そこで、いろいろな植物の新生種や写真を展示し、三原村の自然の素晴らしさをアピールする。それで三原村に遊びに行きたくなると言う展開になったらいいと思います。その他、ネットで見てくださる方に参加していただけるイベントをしたいと考えています。手作り味噌、有名な文鎮や硯の製作体験をホームページで募集して、三原村に遊びに来ていただき、体験していただく。その様子取材し、写真付きで紹介して、充実したホームページにしていけたらと思っています。

三原村には情報源として広報紙、村内無線、村のホームページの三つがあります。広報紙は、月に1回程度しか発行されていけませんので情報が非常に遅いです。村内無線は、放送の時間にいないと聞けないというデメリットがあります。役場のホームページも更新が非常に遅いので、実際には新しい情報がなかなか得られないということがあります。「三原村.com」で役場さんと提携して、役場の情報をリアルタイムで更新して、情報が村民全体に行き渡るような活動ができたらいいと思っています。

Cさん： 「宿毛元気クラブ」です。自分が元気になることで、周りの方あるいは地域も元気

になっていけばいいのではないかと、キャリアが20年以上と結構長くやっています。

活動内容は、松田川、沖の島、四万十川での「障害者アウトドア体験」を主催で10年以上実施しています。カヌーに乗ったり、キャンプをしたりします。

「沖の島アドベンチャーラン」。これは沖の島でマウンテンバイクのレース、マラソン、カヌーなどを行います。明日カヌー編が行われ、かなりの距離をカヌーで巡ります。明日は26人参加があり、名古屋、大阪からも参加されます。日本離れした風景なので、来られた方は感激すること間違いなしです。



沖の島の母島にある石段で、自転車を担いで200mくらい登っていきます。これをあえてコースにして、好きな方が来て、喜んで担いでいきます。

「宿毛自然紀行」。宿毛のいいところを市民の方々に知っていただき、さらにロコミでいろいろな方に紹介するために、スワンテレビという宿毛のケーブルテレビと協力して制作した12本の番組を今年DVDにしました。

「幡多半島エコツアー」は、昨年初めて実施しました。幡多地域の中の幡多半島で、しかもウエストコースト。大月町の西海岸の白浜には、すごくきれいな砂浜があり、この沖をカヌーで行きます。感激するぐらいすごくきれいなところで、ニュージーランドのエイベルタスマン国立公園にも匹敵する景色を持っています。実際にツアーを行い、参加者の意見を吸い上げてみたら、やはり狙いに狂いはなかったというくらいいい意見をいただきました。

「エコツアー」では、宿毛から柏島まで途中橋浦で1泊して行きます。10月は海上編でカヌーで行くツアー、11月は陸上編でウォークと自転車で柏島まで行きました。

これからやってみたいことは、幡多地域は自転車がよく似合うので、「幡多路のサイクルエコツアー」です。

沖の島の隣の鶴来島は人口30人足らずの島で、上陸するとピタッと時間が止まるようになります。すごく気持ちがいい、あくせく考えなくていい、俗に言う癒しの効果があります。これを今度あえて「ヘルスツーリズム」として仕掛けてみたいと思っています。

「幡多半島全体でツーリズム」、「地域を核にしたツアー」、「障害者アウトドア体験」の全国版もやりたいです。四万十川もありますし、多分全国から来てくれますのでやってみたいと思います。あと「幡多半島エコツアーマップ」の幡多地域版を作りたいと思います。

Dさん：「砂浜美術館」のDです。「砂浜美術館」は今年で21年目を迎えます。「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」をコンセプトに、長さ4キロの砂浜を頭の中で「美術館」にすることで地域にある資源やものに付加価値を与えて、心豊かに楽しく暮らすアイデアを生み出す活動です。一般の美術館でいう天井がここでは空、床が砂浜、BGMが波の音、照明は太陽の光だったり月の光だったりします。では作品はというと、砂浜に産卵に来るウミガメや打ち寄せる漂流物、ラッキョウの花もです。そうすると、館長は土佐湾を泳ぐニタリクジラです。

取り組みを三つ紹介します。一つ目はイベントの開催です。これは「砂浜美術館」のコンセプトを分かりやすく伝える一つの方法として位置づけ、「Tシャツアート展」、「潮風のキルト展」といった四季折々のイベントを開催しています。どのイベントも10年を超えて定着してきて、年間約3万人の方が訪れてくださいますが、逆にマンネリ化している部分が数多くあります。これからは、こうしたイベントを通して地域の人や物産と交流をしたいです。例えば「Tシャツアート展」は、他の地域でTシャツがヒラヒラする風景を作り、その地域と自分たちの町、また高知県と人と物産の交流をする。来年はモンゴルの草原で「Tシャツアート展」を行います。これにより、モンゴルの子供たちと町の子供たちとの交流が既に始まっています。他に百貨店との交流、連携も進んでいます。こういったツールに地域の物産を売り出す販路を作りたいと思っています。

二つ目はホエールウォッチングです。これはピーク時に比べて、乗船客が少し減少しており、現在は年間約3,000人ほどです。そのため、この町にしかできないホエールウォッチングを考えています。町内にある5つの港を拠点としたホエールウォッチングと海産物の購入、食事、体験を組み合わせたツアーです。これも単純に体験を組み合わせるのではなく、そこから生まれる新しいテーマを集客につなげたいと思います。

三つ目は、指定管理者として高知県立土佐西南大規模公園の管理運営を行っています。地域のNPOがこうしたものを担当するメリットが活かせる方法を考えています。その一つが砂浜を使ったトレーニングです。町の雇用促進協議会と協力して、大学と地域のスポーツ団体や教育機関と連携し、砂浜トレーニング効果のデータ実証をするプロジェクトを今月から始めています。これで有効なデータが出れば、合宿の誘致や健康対策といった切り口から公園施設と砂浜を組み合わせたプログラムが作れるのではないかと、そうなったときにこの砂浜が健康という名のアトリエになるのではないかと、そうなれば公園の指定管理者になる意味を見つけられると思っています。

「砂浜美術館」の活動は20年経ちますが、まだまだ地域経済に寄与できる仕組みづくりができていないところが多いです。いろいろな人の知恵や感性に触れて、「砂浜美術館」の作品を作っていくことで仕事につなげたいと思っています。というのは、この町で育った若い世代が仕事がないからと外へ出ていくのではなく、自分たちの取り組みを見て、自分たちで仕事を作っていけると感じてもらえることが、これからの大きな目標です。

Eさん：「NPOとさしみず」のEです。平成15年4月に発足して、主な活動内容として市民文化会館と市民図書館の指定管理業務を行っています。

他の活動に「出前事業」があります。スタッフは文化会館と図書館とに分かれて日々業務を行っていました。私がホールに配属されて仕事をしていましたら、ある日おばあちゃんが途中で帰っていました。それで聞いたところ、バスの時間に間に合わないとのことでした。何度かそういった話を聞いて、事業を外に持ち出してお年寄りを中心に喜ばすことはできないかと、平成16年10月にできたのが「出前事業」です。各地域の集会所、休園になった保育園などに出向いて、漫談や落語を聞いてもらったり、懐かしの映画を上映しました。口コミでかなり評判が広まり、住民や区長さんを中心に、「次はぜひうちに来てもらいたい」と依頼を受け、それを調整して、すぐに出向いて事業をすることをずっと続けています。お客さんも参加して、笑っていただける、何でもありの形で進めています。ホールだと椅子に座るのが厳しかったり、長時間座っているのがきついというお年寄りも、このような場所でしたら椅子の方もいれば、座ったままの方もいるという感じで、各地区で32回終了しています。本当に気楽に、楽しく和気あいあいと事業をやっています。毎回お年寄りに非常に喜んでもらい、実はスタッフもすごく楽しんでます。ある落語家の方に、「これだけスタッフも楽しんでいいんでしょうか」と聞いたところ、「地域の活性化のためには、裏方さんがまず楽しまないで長続きしないと思います」と笑って言ってくれたことが印象的でした。これからも小さいですけども「出前事業」をぜひ続けていきたいと思っています。

知事：それぞれが非常に活発にやっておられて、すばらしいと思います。

まず「三原村.com」です。産業振興計画で外に打っていくときに大容量のインターネットがあったら、地理は関係ないですからこれぐらいいい武器はないと思います。地産外商の中で県としてもポータルサイトみたいなものを構築したいと考えています。結局、サイトはたくさんあるのでその中でいかに目立つかが命だと教えていただいたので、高知県の名称を使って、それに集合していただいて売り込んでいこうと思っています。

バーチャル植物園はおもしろいですね。どうやってやりますか。

Bさん：インターネットのサイト上で三原村に咲いている美しい花々や、農作物、例えば最近ユズに取り組んでいますので、その良さや育てているところなどを植物園という形で写真を出したいです。他に写真コンテスト。花でしたら、私はこんなきれいな花の写真撮りましたというものを募集して、コンテストみたいなものをやろうと思っています。

知事：今いろいろな形で地産外商をやっていくぞと、商談会や高知県産品フェアを東京、大阪では4月、5月、6月で15件行いました。昨年の4倍くらいのスピードで、どんどん売り込みをやっています。特に東京にはしっかりとした広告塔が必要です。例え

ば沖縄県のアンテナショップには200万人が来ています。しかし、今の高知県は11万人です。だから、そのくらいパワーのあるアンテナショップをつくりたいと動いています。いずれにしても、高知県産のものを売っていくときに必ずQRコードのついたビラをくっつけて売ろうと思います。例えば三原村の商品を売るときは「三原村.com」と付けて売っていく。そしたら、次につながります。

「宿毛元気クラブ」さんの「幡多半島エコツアー」は、ものすごくきれいですね。私もこんなところに行ってみたいです。もうそのまま観光資源みたいな感じがします。

幡多地域は広域観光圏構想として新たに認定をされました。今年4月からできるだけ観光地同士で連携をして、商品を作って売っていきこうと取り組みが始まっています。

高知県は雇用も少なく、所得も少なく、若者が地域で働ける場が少ないです。地域ですばらしい取り組みが始まったときに、これを何とかビジネスにつなげていけないか、ここで人が雇われて、若者が地域に残れるようにならないか、そういう道を模索したいと取り組みを進めています。

ニュージーランドにも負けないくらいのことを地域の資源として発掘されているところはなかなかできないと思います。私にはこれは超魅力的な観光商品のように見えます。どんどん県外に売り込んでいきたい、一種の観光事業に発達もしていくのではないかと感じます。そのあたりのお考えをお聞きしたいです。

Cさん：「幡多半島エコツアー」に関しては、昨年国土交通省の産業創生調査の一環として行いました。実際の移動のための船、ウォータータクシーと言いますが、例えば宿毛からは大きな田ノ浦港がありますので、そこから船で移動してトレッキングとかカヌーをする。目的地に着いて帰るときには、またウォータータクシーを使えば、ちゃんと出発地に帰ってこれる、これは一つの産業になります。他に、大月町は学校統合で沿岸部の学校がほとんど廃校になりました。それを活かして、宿泊施設あるいは体験施設としてツアーを組み合わせていく。実際に橘浦で泊まったときには、地元の人はいいい例を示してくれたと大喜びでした。だから個人あるいは任意団体程度でやるには少し難しいところがありますが、やりたい人が何人かできて、いろいろなメニューを揃えてやっていけばいいかと思います。

幡多広域観光圏構想は、民間レベルではもう少し先行している部分があります。「エコ幡多」というので幡多地域全体でネットワークを作り、商品とまではいきませんが、ビジネスモデルを作っていこうと。それも今までのありきたりの体験ではなく、自転車やカヌーを組み合わせた形でやっていこうと。いわゆる観光ガイドブックに載っているものだと四万十川に来るとこれとこれみたいな決まったものしかないですが、例えば河原の木でツリークライミングをやったり、松田川の出井に甌穴がありますので、チュービングというダンプのタイヤにネットを張って、その上に乗って川下りをする。そういう感じでいろいろなメニューを作っていけたらと思っています。滝を登っていく、溪谷を登って行くシャワークライミングもどこでもできます。

知事： 観光商品になると定時・定量・定価格・定品質の4定が必要になると言われます。こちらが受け入れたいときに受け入れてあげるのではなく、向こうが来たいと言ったら、ルールに従い、お客さんのニーズに従って、きちんとサービスを提供しないといけません。お客さんが言ってきたときには必ず確実に受け入れられないと、観光商品にならないと教えていただいたことがあります。そのあたりはどうでしょうか。

Cさん： 今の体制では無理だと思います。その必要性があるかなと少しはありますが、相手にどこまでも合わせる必要はない、相手にもある程度こちらに合わせてもらう。そうしないと、エコツーリズムと名前は通っていても、実際には地域破壊と同じことをやっている場合も結構ありますので。たくさん来てもらうのではなく、できたら何人までとか制限ができるようになれば、逆に価値が上がっていくと思います。

知事： 募集の範囲はどこですか。

Cさん： 明日のカヌーのアドベンチャーランには名古屋や大阪からも参加されます。そういう人は、高知県に行きたい、高知県には何があるかなとネットで探していくうちにたどり着いた部分があるので、きちんとした幡多地域のポータルサイトがあり、短い時間でたどり着ける仕組みがほしいと思います。県にそういうのをお願いできたらもっと全国から来ると思います。あと逆に外国人もターゲットにして、外国人が来ることで日本人が来るという逆の展開の仕方もありかなと思っています。

知事： ありがとうございます。

「砂浜美術館」の館長がニタリクジラというのは初めて知りました。先々進めていくにあたり、こういうところが課題なのでこういうところで一押し二押しあればなどご指摘があれば教えてください。

Dさん： 1市町村でできる部分と、広域で売り出していかないと話ができないところと両方ありますので、自分たちの持っている資源の切り口で話をする中で、もう少し広い範囲で展開していく可能性があるときに、いかに使えるつながりがあるかではないかなと思います。

知事： 広域で、具体的に何かありますか。「砂浜美術館」は県外でも確かに有名です。結構知っている人いるような気がしましたけど。

Dさん： 風景を売っていく部分がメインにあり、風景を通じて香りなど写真からいろいろなものを感じます。そのイメージと、例えば幡多地域のブランドイメージとは違うと思いますが、いろいろな各市町村のイメージとトータルとしてのイメージをいかに作れるかが課題ではないかと思っています。

知事： 市町村のイメージと地域地域のイメージ、トータルの幡多としてのイメージですか。高知県のように大きくなるとイメージを一義に定めることのリスクも出てくると思います。ものすごく単純な言い方ですが、「高知県は山の国です」と言ったら海はどうなる。「海の国です」と言ったら山はどうなる。だからシーンシーンにおいて、例えば高知県は「食の国」、「歴史の国」、「幕末維新の国」、「清流の国」、「よさこいの国」そういう形で、あるエリアにおいてある側面から切ればということではないかと思います。一つで切る言葉は何か思い浮かびますか。

Dさん： 「砂浜美術館」だったら、風景でコミュニケーションをしていきます。そういうコミュニケーションツールがいろいろな場にあったら、おもしろいと思います。

知事： 「NPOとさしみず」さん 32 回もやられたのはすごいですね。かなり細かいエリアでやられたんですか。

Eさん： そうです。少ないときには 20 人とか 15 人くらいのお客さんでやります。最初は地域に集まってくれているお客さんのところで場所をお借りしていましたが、だんだんこの事業のためにわざわざ集まってくれるという流れもでき始めました。

知事： 一つ気になったのは、本当に喜んでいただいていると思いますが、お金が大変だろうなど。こういう方呼んでこようとしたら結構ギャラが要るのではないですか。

Eさん： 経費はある程度発生しますが、リーズナブルな方もいれば、最近プロの落語家さんも来てくれるようになり、そういう場合にはお客さんに入場料をもらわないといけなくなったりします。事業で利益を上げつつ還元という形でないと、正直厳しいところはあります。

Cさん： 知事は沖の島や鶴来島には行かれたことはありますか。沖の島か、私のお勧めのウエストコーストで、今度カヌーを体験していただきたいと思います。

知事： まだ行ったことはないです。私は川でやる手漕ぎボートが大得意で、カヌーも大好きなので 1 回やらせていただきたいと思ってはいますが。

NPOの活動に対して、県とこういう形で一緒にできればもっとうまくいくという話があるとすごく勉強になるんですが、何かございませんか。

Bさん： せっかくページを立ち上げて 1 日のアクセスが 5 人、10 人では何をしているのか分からないです。アクセスを増やすためにページの信頼性を頼みたいですが。やはりどこの誰がやっているのか分からないとなかなか見てくれない、内容がいつも同じでも見てくれない。できれば県のオフィシャルページと相互リンクさせていただいたら

一番ありがたいです。

知事： 分かりました。新しいポータルサイトみたいなものを作りますので、そことリンクしていただければと思います。

Dさん： NPOにはいろいろな形があると思いますが、新しいものを生み出していくことがすごく大きいと思っています。例えば若い世代の人たちのアイデアが形になる体験がもっとたくさんあれば、大人になったときにこの町で何かやれるという自信につながると思います。今、県立大方高校では地域の課題を解決するという授業があり、黒潮町で作っているドクダミの商品化をテーマに課題が与えられ、ドクダミ粉でドクダミ団子を作っています。それが実際に商品化され、パッケージが付いて、店頭に並んでいる姿を見たら、ものすごい自信になると思います。その自信がこの地域で活動していくきっかけとなり、この地域で生活していける事例が生まれてきたらすばらしいと思います。NPOの支援の中に、若い世代が活躍できる場づくりをたくさん作っていただけたらと思います。

知事： 例えばNPO法人さんで高校生募集、アイデア募集をする際の一番最初のきっかけ、つながりができたらいいんでしょうね。参加して成功例が出てくるのがいい、もちろんそうだと思います。

高知市にある万々商店街が全国1万3,000の商店街の中から「新・がんばる商店街77選」に選ばれました。選ばれた大きな理由の一つは、万々とクマをかけたクマーマというクマのぬいぐるみのキャラクターで、子供や若い女性に人気だそうです。それがきっかけで人が集まるようになり、いろいろな振興が図られているということです。キャラクターは伊野商業高校デザイン科の皆さんに頼み、作品を審査して決めました。これもいい例だと思います。デザイン科の皆さん全体がものすごく元気づいたと思います。

問題は、どうやって高校生たちの参加機会を作っていくかです。私たちがアイデアを募集して、つないでいければいいのかもしれませんが。例えば、教育委員会などに話をして、最初のきっかけはできるでしょう。実は、この「対話と実行」座談会は高校生ともたくさんやります。そういう活動に「ぜひみんなも積極的に参加しましょう」という話もしたいと思います。